

# サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化

1940年代以降の英国大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン

Changing the Roles of Subject Librarians in University Libraries  
within the U.K. since 1940

呑海 沙織<sup>†</sup>  
DONKAI Saori

**概要：** 英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの役割は、時代とともに変化している。本稿では、サブジェクト・ライブラリアンの定義・類義語、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン類型とその変化を視座に入れながら、サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化について論じる。

**キーワード：** サブジェクト・ライブラリアン, 大学図書館, 英国  
**Keywords :** Subject librarians, University libraries, United Kingdom

## 1. はじめに

英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの歴史は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の主題専門家 (subject specialists) まで遡ることができる。しかし、サブジェクト・ライブラリアンが大学図書館に広く普及し始めたのは、第二次世界大戦後のことである。1940年代に、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン (University College of London: UCL) にサブジェクト・ライブラリアンが導入されて以降、戦時中に失われた大学のコレクションを再構築するために、目録や分類といった機能 (function) ではなく、主題 (subject) に重点をおいた人員配置がなされるようになった。その後1960年代に、高等教育の拡大によって新興大学が次々と設立されるに伴って、サブジェクト・ライブラリアンは、大学図書館に浸透していく。

他方、「サブジェクト・ライブラリアン」というタイトルがつけられていても、その業務内容が時代や大学によって異なったり、サブジェクト・ライブラリアンに類似する呼称が多数存在したりと、

<sup>†</sup> 京都大学医学図書館

サブジェクト・ライブラリアンそのものを捉えるにはいくつかの壁が存在する。

本稿では、サブジェクト・ライブラリアンの定義・類義語、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン類型とその変化を視座に入れながら、サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化について論じる。

## 2. サブジェクト・ライブラリアンとは

「わたしは言葉を使う時に」ハンプティは、いささか威張りくさった口調で言いました。「自分がえらんだ意味だけで使うのだーそれ以上でもそれ以下でもなく」(『鏡の国のアリス』)

「主題専門家 (subject specialist) は、ハンプティ・ダンプティの言葉のようだ」<sup>1</sup>という表現が如実に語るように、主題専門家やサブジェクト・ライブラリアンという言葉が示す範囲は、使われる場所や時代によって異なる。

ハンプリーズ (K. Humphreys) は、1966年にオランダのハーグで開催された IFLA

(International Federation of Library Associations and institutions) 第32回総会において、主題専門家を「ある特定の主題分野において、図書館の技術的業務あるいはレファレンス・サービスを発展させるために任命された図書館スタッフ」であると定義している<sup>2</sup>。

また、1976年の論文「イギリス大学図書館におけるサブジェクトスペシャリストについて」において及川は、「いわゆる図書館のSubject Specialization (主題専門別制) というのは、特定主題の図書館資料を選択収集すること、専門分野の書誌作成および、そのガイダンスを行うこと。そして、関係分野の教官研究者との相互協力関係を確立することなどにその機能的特質を見ることができよう」と述べている<sup>3</sup>。

“International encyclopedia of information and library science”では、「ひとつ以上の特定の主題について特別な知識を有し、その主題分野において責任をもつ図書館員。受入、蔵書構築、利用者へのサービスを含むこともある。アメリカ合衆国では、しばしばビブリオグラファー (bibliographer) として知られ、大陸ヨーロッパでは研究図書館員 (research librarian) として知られることもある。後者のケースでは、それぞれの主題分野における研究 (しばしば書誌的な) を行うための明示的義務がある」<sup>4</sup>としている一方で、ハイ (F. Hay) は、主題専門家を 1) コレクション管理, 2) レファレンス, 3) 教員との連携 (faculty liaison), 4) 目録・分類, 5) ビブリオグラフィーの5つの観点から述べているが、主題専門家の第一義的な任務はビブリオグラフィーであるとしている<sup>5</sup>。

更に、ガストン (R. Gaston) の「サブジェクト・ライブラリアンは、コース・プランニングやラーニング・スキルの教授など、伝統的にアカデミック・スタッフの責務であるとみなされてきた役割を、より担うようになってきた。」<sup>6</sup>とする教育・学習への関与や、「サブジェクト・ライブラリアンの役割は、必要な学習リソースが柔軟な方法で提供できるように、アカデミック・コース・チームと協働する」<sup>7</sup>ことについてもサブジェクト・ライブラリアンの役割であるとするピーターズ (J. Peters) の論もある。

このように、サブジェクト・ライブラリアン(サ

ブジェクト・スペシャリスト)の役割は、当該主題分野における、資料の選択、蔵書構築、技術的業務、書誌作成とそのガイダンス、教員とのリエゾン、受入、レファレンス、コース・プランニング、ラーニング・スキルの教授、学習リソースの提供と多岐にわり、時代や場所によって異なっている。本稿では、サブジェクト・ライブラリアンを「特定分野の特別な主題知識を持ち、当該主題分野をベースに業務を行う図書館員」とゆるやかに定義するとともに、その役割の変化について考察を行いたい。

### 3. サブジェクト・ライブラリアンの類義語

次に、1981年及び1995年に実施された英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンに関する調査から、サブジェクト・ライブラリアンを示す「呼称」の多様性を確認したい。

#### 3.1. 呼称の多様性

1981年にウッドヘッド (P. Woodhead) 及びマーティン (J. Martin) によって<sup>8</sup>、1995年にマーティンによって<sup>9</sup>、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンに関する調査が行われている。1981年の調査では64の大学図書館の内、回答があった61大学図書館について、1995年の調査では59の大学図書館の内、回答があった45大学図書館についての調査結果が発表されている。尚、1992年の継続・高等教育法により、英国の大学数は倍増しているが、1995年の調査には1992年以降に大学としての法人格を有するにいたったいわゆる新大学 (new libraries) は対象とされていないことに留意する必要がある。

1981年の調査結果では、英国の大学図書館では、広く‘subject librarians’が使われている一方で、バース大学では‘school librarians’、ダラム大学では‘liaison officers’、インペリアル・カレッジでは‘subject assistants’、リーズ大学では‘subject consultants’、レスター大学では‘reference librarians’、ニューカッスル大学及びオープン・ユニバーシティでは‘liaison librarians’、ストラスクライド大学では‘readers’ advisers’がそれぞれ使用されていることがわかった。

また、1995年の調査結果では、回答館の半数において‘subject librarians’が使用されていた。しかし、アバディーン大学やリーズ大学では‘faculty librarians’、バース大学では‘school librarians’、リーズ大学では‘subject consultants’、ウェールズ大学バンガー・カレッジでは‘subject support officers’、ラフバラ大学では‘academic librarians’、ニューカッスル大学、オープン・ユニバーシティ、スターリング大学では‘liaison librarians’、キール大学では‘link librarians’、レスター大学では‘information librarians’、アストン大学では‘information specialists’が使用されていることが明らかにされた。

このように英国の大学図書館では、‘subject librarians’という呼称が中心として使われているものの、大学図書館によって、さまざまな呼称が使用されていることがわかる。

### 3.2. 北米モデルと英国モデル

また、北米と英国では、サブジェクト・ライブラリアンに求められるものやその役割に差異がみられるようである。

LISA (Library and Information Science Abstracts) におけるサブジェクト・ライブラリアンに関連する索引語は、‘subject specialists’及び‘subject specialization’であるが、これらの索引語は北米バイアスがかかっていると、ガストン (R. Gaston) は指摘している<sup>10</sup>。北米モデルでは、主題の専門家という側面が強調されているのに対し、英国モデルにおける‘subject’は、主題知識そのものというより、情報サービス部門のスタッフにおけるグルーピングという意味合いが強いという。

北米では、修士号以上の主題に関する高い専門性が求められる傾向があるのに対し、ハンフリー (K. Humphreys) が「必ずしも予めその主題分野の知識や学位を有する必要はない」<sup>11</sup>とするように、英国では主題知識について北米ほど高い専門性が求められない傾向にあるといえるようである。また、ランカスター大学で、「主題の専門家でその領域の研究を行っている者もあるが、扱うあらゆる主題の観点から本当の意味での専門家とはいえないので、あえて‘subject specialists’では

なく、‘subject librarians’という呼称を使う」<sup>12</sup>とされているように、英国ではあえて‘subject specialists’という呼称を使わない傾向にあるといえる。

このように、米国モデルでは、サブジェクト・ライブラリアンに関して主題の専門家という傾向が強いのに対し、英国モデルでは、個々の図書館員に対して米国モデルほど、高い主題知識が求められない傾向にある、という相違がみられるといえることができるだろう。

## 4. サブジェクト・ライブラリアン類型

このようにさまざまな呼称をもつサブジェクト・ライブラリアンであるが、実際に大学図書館においてどのような形で導入されているのだろうか。前述の1981年及び1995年のサブジェクト・ライブラリアンに関する調査結果から、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン類型及びその変化について考察する。

### 4.1. サブジェクト・ライブラリアン五類型

ウッドヘッド及びマーティンは、スクリブナー (J. Scrivener) <sup>13</sup>によるサブジェクト・ライブラリアン類型を参考に、主題という観点から大学図書館を下記のように5つの型に分類している。

以下に、それぞれのタイプの略説と、1981年及び1995年の調査結果をまとめる。

#### A. 機能型 (Functional)

機能型とは、シニア・スタッフが、受入、目録、ILL、レファレンスなど、主題ではなく、機能 (function) 別に組織されているタイプである。尚、ここでいうシニア・スタッフとは、アシスタント・ライブラリアン<sup>14</sup>以上のライブラリアンを指す。原則として、サブジェクト・ライブラリアンが組織として配置されていない大学図書館がここに分類される。

1981年の調査では13館がこの型に分類されているが、1986年の調査ではわずか6館が、この型に分類されるにとどまっている。

#### B. 二元型 (Dual)

二元型とは、主題によって配置されているシニ

ア・スタッフが一方で、他の要素（機能別など）によって配置されているシニア・スタッフがいるタイプである。つまり、シニア・スタッフの一部がサブジェクト・ライブラリアンであるという大学図書館がこのタイプに分類される。

1981年の調査では18館がこの型に分類されていたが、1986年の調査では29館がこの型に分類されており、大幅な増加がみられる。

### C. 混成型 (Hybrid)

一部あるいは全てのシニア・メンバーが、主題によって配置されているタイプである。主題によって配置されているこれらのシニア・メンバーはまた、主題ベースでない他の業務をも行う。

1981年の調査では20館が、1986年の調査では4館が、このタイプに分類されており、大幅な減少がみられる。

### D. 三階層型 (Three-tier)

三階層型は、1961年にラングスタッド (E. Langstadt) によって発表された論文<sup>15</sup>によって、英国の図書館界に紹介された。“German ‘Fachreferent’ system”として紹介されたこのシステムは、主題分野の知識をもった ‘academic subject specialist’, 技術的業務を行う ‘qualified librarians’, 単純業務を行う図書館スタッフの三階層に分けられる。

1981年の調査では7館がこのタイプに分類されているが、1986年の調査ではわずか2館が、このタイプに分類されるにとどまっている。

### E. 主題中心型 (subject divisional)

米国に起源をもつこのタイプでは、専門分野をもったシニア・スタッフと他の図書館スタッフから構成される主題チームが形成され、特定主題分野の資料やサービスについて責務をもつ。

1981年の調査では、バーミンガム大学、グラスゴー大学、ロンドン大学の3大学図書館において主題中心型が採用されていたが、1995年の調査では、グラスゴー大学及びロンドン大学が二元型へ移行した一方で、アバディーン大学及びノッティンガム大学が二元型から主題中心型へと移行している。

## 4.2. サブジェクト・ライブラリアン類型の変化

図1は、1981年と1995年のサブジェクト・ラ

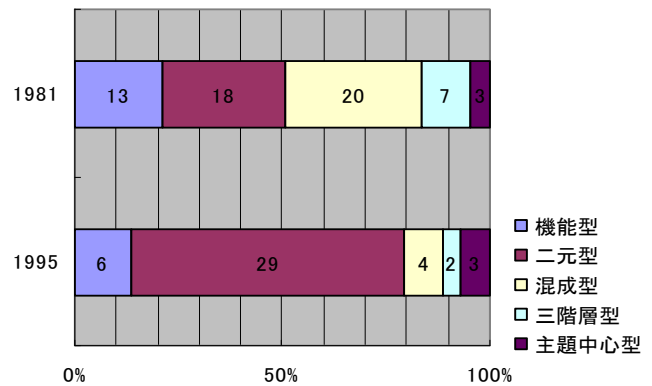


図1 サブジェクト・ライブラリアン類型の変化

イブラリアン類型それぞれが占める割合を比較したグラフである。1981年の調査では、混成型 (33%) が最も大きな割合を占め、二元型 (30%)、機能型 (21%) がこれに続いているが、1995年の調査では、二元型が大きく増加し、回答館の65%を占めている。つまり、シニア・ライブラリアンの一部がサブジェクト・ライブラリアンであるという大学図書館が65パーセントを占めることになる。

機能型、二元型、混成型、三階層型、主題中心型のうち、サブジェクト・ライブラリアンが存在する型は、二元型、三階層型、主題中心型である。1981年の調査結果では、この3タイプが占める割合は回答館の46パーセントを占めるが、1995年の調査結果では77パーセントを占めている。1981年の調査の回答率が95パーセント、1995年の回答率が76パーセントであること、また、調査対象が古い大学 (old universities)<sup>16</sup>に限定されていることを考慮に入れなければならないが、少なくとも古い大学においては、サブジェクト・ライブラリアンを導入している大学図書館が増加しているということがいえるだろう。「大学の収入が縮小される中において、サブジェクト・ライブラリアンは、将来において存続させるのが難しくなるかもしれない」という1981年のウッドヘッドとマーティンの予測とは異なる結果となっている。

## 5. 役割の変化

サブジェクト・ライブラリアンの役割は、高等教育政策や情報通信技術の発達など、大学図書館を取り巻く環境の変化と共に変化しつつある。本節では、第二次世界大戦後の英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの役割の変化について述べる。

### 5.1. 黎明期・発展期

英国で初めて主題専門家としてアシスタント・ライブラリアンが指名されたのは、国立図書館やオックスフォード、ケンブリッジの図書館でのことである<sup>17</sup>。しかし、大学図書館にサブジェクト・ライブラリアンが普及し始めたのは、1940年代以降のことである。

1940年代に、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン、続いてリーズ大学に導入され、以降、英国の大学図書館にサブジェクト・ライブラリアンが普及していくこととなる。英国の大学図書館において、機能別よりも主題別に重きをおく組織モデルは、歴史的にチェンバー (R.W. Chambers) におうところが大きい。また、リーズ大学でのサブジェクト・ライブラリアンの導入については、オフォー (R. Offor) が大きな役割を果たした。

その背景には、戦後の大学図書館における蔵書構築にある。1940年代後半から1950年代にかけて、第二次世界大戦中に失われた、あるいは散逸した蔵書コレクションを再構築するために、多くのサブジェクト・ライブラリアンが必要とされるようになったのである。ガストン (R. Gaston) が「サブジェクト・ライブラリアンは、適切な印刷資料の蔵書構築を行う必要から、発展してきたと思われる」<sup>18</sup>と述べているように、サブジェクト・ライブラリアンは、印刷資料を中心とした蔵書構築の必要性から普及したということができよう。適切な蔵書構築の必要性は、学部の研究及び教育のニーズから生じており、サブジェクト・ライブラリアンにその役割が求められた。

また戦後、米国及びソ連という二大国と、世界的競争下におかれた英国の経済的、政治的背景も間接的にサブジェクト・ライブラリアンの普及に影響したといえるだろう。世界的な経済力、政治力に必須となったのは、貿易の拡大と科学技術の

発達であり、このような社会情勢を背景に高等教育は多額の資金が投入される投資対象となった<sup>19</sup>。

このような背景から、1963年に『ロビンズ報告書』が発表され、以降次々と大学が設立されてゆく。1961年2月、マクミラン首相任命の委員会として、高等教育の諮問機関が設置された。1963年に約2年半にわたる審議の集大成として全4巻からなる『高等教育 (Higher Education. Report of the Committee appointed by the Prime Minister under the Chairmanship of Lord Robbins)』<sup>20</sup>が発表された。議長であるロビンズ卿 (Lord L. Robbins) の名をとって、『ロビンズ報告』と呼ばれるこの報告書では、イングランド、ウェールズ、スコットランドにおける高等教育の全面的見直しとその改善策について広く検討された。同報告書は、英国初の高等教育における包括的な報告書であるといわれており、英国の高等教育政策はこの報告書から始まるという見解もある<sup>21</sup>。『ロビンズ報告』では、「高等教育の課程は、それに従事しそれを続ける能力や資格があり、かつそれを望むもの全てに利用できるようになるべきである」という提言がなされ、後の英国における高等教育拡大政策の源となった。『ロビンズ報告』では更に、教育が経済に与える影響と、教育を受ける機会の均等化について言及されている。

高等教育の拡大を勧告した『ロビンズ報告』以降、1961年にサセックス大学、エセックス大学、1963年にイースト・アングリア大学、ヨーク大学、1964年にランカスター大学、1965年にウォーリック大学、ケント大学、スターリング大学等、後に板ガラス大学 (Plate Glass Universities) と呼ばれる大学がと設立され、これら新興大学における図書館の蔵書構築を行うために、更にサブジェクト・ライブラリアンが必要となった。

更に、1967年の『パリー報告 (Report of the Committee on Libraries)』<sup>22</sup>が、この流れを後押しすることになる。『パリー報告』は、『ロビンズ報告』以降、拡大した高等教育のニーズに対して、いかに効果的・効率的に図書館サービスを提供するかに関して検討された報告書である。同報告書では、利用者サービスを改善することを目的にサブジェクト・スペシャリストの導入が勧告されており、サブジェクト・ライブラリアンの普及に大きな影響を与えたといわれる。英国の大学図書館

におけるサブジェクト・ライブラリアンのピーク時は、1960年代から1970年代前半であったといえることができる<sup>23</sup>。

## 5.2. 停滞期

しかし、1980年代になると、大学における財政難及び電子的資料の増加と共に、サブジェクト・ライブラリアンは停滞期に入る。

1970年代に入ると、オイルショック、炭鉱のストライキ、中東戦争の勃発などによるインフレーションが起こる。1977年には大学への政府補助金の5年毎の一括支給が廃止され、1年毎の支給へと変更された。更に追い討ちをかけるように、サッチャー政権下の公共費削減の一環として、1981年には大学への政府補助金が3年間で15パーセント削減された。いわゆる「1981年の大削減」と呼ばれるこの大規模な大学予算の削減は、大学図書館の資料費にも大きな打撃を与えた。

一方、1980年代より、文献データベースなどの電子的資料が導入されるようになった。高額な電子的資料の導入によって、印刷資料費は侵食され、「適切な印刷資料の蔵書構築」をその主たる役割としていたサブジェクト・ライブラリアンの存在意義に蔭りを与えた。大学の財政逼迫によって、図書館に主題の専門家を置くのは難しくなっているのでは、という予測もこの時期になされている<sup>24</sup>。

また、情報通信技術の発達・導入により、主題よりも、テクニカルな部分にスポットがあたるようになる。ヘーゼルタインは、主題のエキスパートであることよりも、技術的スキルをもつことが図書館員としてより重要であるとし、エンドユーザへのサービスがよりシステムティックになることにより、サブジェクト・ライブラリアンの一般モデルは消滅するであろうと述べている<sup>25</sup>。大学図書館において「所蔵からアクセスへ」というパラダイムシフトが起こり、情報流通のいわゆる「中抜き（disintermediation）論」が浮上した1980年代から1990年前半にかけて、サブジェクト・ライブラリアンの停滞期であったといえることができる。

## 5.3. 転換期

1990年代に入ると、高等教育の拡大政策に伴う

大学図書館の問題が顕在化する。

1992年に、イングランド高等教育財政審議会、スコットランド高等教育財政審議会、ウェールズ高等教育財政審議会による高等教育合同財政審議会（Joint Funding Council）によって、図書館検討委員会（Libraries Review Group）が設置された。ウォーリック大学副学長<sup>26</sup>ブライアン・フォレット卿（Sir Brian Follett）を議長とする図書館検討委員会は、大学図書館における課題を洗い出し、それぞれについて勧告を行う『高等教育合同財政審議会図書館検討委員会報告書（Joint Funding Council's Libraries Review Group Report）』（Joint Funding Council(1993)）、通称『フォレット報告』を翌1993年に発表した。同報告書は、1967年の『パリー報告』以来はじめての、英国高等教育における図書館及び関連機能に関する全般的な報告書であるといわれている。高等教育が抱える問題を明らかにし、後の高等教育における学術情報政策に大きな影響を与えた。図書館検討委員会の当初の目的は、学生の増加に伴う大学図書館スペースの問題を検討することであった。しかし、結果として大学図書館スペースの問題を検討するとどまらず、「大学図書館の発達にとって最も重要な原動力」<sup>27</sup>となり、後の学術情報政策や学術・知識情報基盤であるJISC（Joint Information Systems Committee）に大きな影響を与えるものとなった。この『フォレット報告』では、図書館員の訓練やスタッフ・デベロップメント（Staff Development: SD）<sup>28</sup>の機会の欠如は、図書館や情報提供における変化や発展を阻む唯一かつ最も深刻なものであるとされている。

同年、『フォレット報告』から派生する形で、人的資源に関する報告書『学術図書館における人的資源管理に関する報告書（A Report on Human Resource Management in Academic Libraries, for the Joint Funding Councils' Libraries Review Group）』<sup>29</sup>、いわゆる『フィールデン報告』が発表されている。『フィールデン報告』では、サブジェクト・ライブラリアンのタイプとして、1) 図書が発注・分類・目録にその主たる責務を持つタイプ、2) アカデミック・スタッフと緊密な関係を保ち、協働するタイプ、3) その専門分野において研究者と同等の立場をもつタイプ、の3つに分類したうえで、今後、サブジェクト・ライブラ

リアンの役割として発展するのは、2 番目のアカデミック・スタッフと協働する「アカデミック・コンバージョン」であるとしている。

また、この時期になると、電子的資料やデジタル・ツールはますます増加し、単にネットワーク上の情報にアクセスするだけでなく、これらを有効に活用するためのスキルとしての情報リテラシーが必要となってくる。高等教育機関においても、情報リテラシー教育の必要性が認識されるようになり、図書館ガイダンスや利用者教育という実績をもつ大学図書館において、この役割の一端が担われるようになる。情報リテラシー教育には、基本的に主題の知識が必要であるため、サブジェクト・ライブラリアンが図書館において情報リテラシー教育を担うこととなり、さらには授業への関与も求められるようになった。

こうして、1990 年代以降、情報リテラシー教育や授業への関与という形で「教える」という新しい役割を得て、サブジェクト・ライブラリアンは転換期を迎えることとなった。

#### 5.4. サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化

以下に、サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化について、まとめておきたい。表は、サブジェクト・ライブラリアンの発展を、黎明期、発展期、停滞期、転換期に分けて、表したものである。

英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの歴史は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の図書館に遡ることができるが、研究志向でない現代型のサブジェクト・ライブラリアンの源は、1940 年代にユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン (UCL) に設置された主題専門家であるといえることができる。

表 サブジェクト・ライブラリアンの発展

黎明期	～1930 年代	オックスフォード、ケンブリッジ大学、研究志向
成長期	1940 年代～ 1970 年代	UCL から新興大学へ、蔵書構築、所蔵 (holding)
衰退期	1980 年代～ 1990 年代前半	サブジェクト・ライブラリアン消滅論、「所蔵からアクセスへ (holding to access)」、中抜き (disintermediation) 論

転換期	1990 年代後半～	情報リテラシー教育、授業への関与、学習リソースの整備
-----	------------	----------------------------

戦後、戦時中に散逸されたコレクションを再構築するために、サブジェクト・ライブラリアンは徐々に大学図書館に導入された。高等教育の拡大を勧告した 1963 年の『ロビンズ報告』以降、次々と設立された新興大学にもサブジェクト・ライブラリアンが導入され、大学図書館においてサブジェクト・ライブラリアンが普及することとなった。この時期の図書館は、資料を所蔵 (holding) し、所蔵する資料を提供することによってサービスを提供していたといえる。この時期のサブジェクト・ライブラリアンの主たる仕事は、蔵書を構築し、組織化することであった。更に年月を経ると、サブジェクト・ライブラリアンの役割として、蔵書を活用したレファレンスや利用者教育、教員との連携 (リエゾン) が、サブジェクト・ライブラリアンの役割として付け加わってゆく。1940 年代から 1970 年代のこの時期は、サブジェクト・ライブラリアンの成長期であると考えられる。

しかし、1980 年代に入ると、大学の財政難及び電子的資料の増加により、サブジェクト・ライブラリアンの位置付けに疑問が呈されるようになる。財政難及び電子的資料への振替により資料費が抑えられることによって、蔵書構築及び組織化を主たる業務としていたサブジェクト・ライブラリアンの仕事は減少することとなる。また、ヘーゼルトインに代表されるようなサブジェクト・ライブラリアン消滅論やマーティンらによるサブジェクト・ライブラリアンの減少という将来的見通しにみられるように、サブジェクト・ライブラリアンの位置づけに揺らぎが生じた。

また、情報通信技術の発達によって、直接、エンドユーザが容易に情報にアクセスできる環境が整うにつれて、いわゆる情報流通の「中抜き (disintermediation) 論」が浮上したのもこの時期である。更に、資料を所蔵するだけでなく、情報へのアクセス権を提供することが図書館の重要な役割として付加されるようになり、「所蔵 (holding) からアクセスへ」というシフトが起こった。サブジェクト・ライブラリアンだけでなく、ライブラリアンがその存在意義を改めて問われる

ようになった1980年代から1990年代初頭にかけては、サブジェクト・ライブラリアン停滞期であ

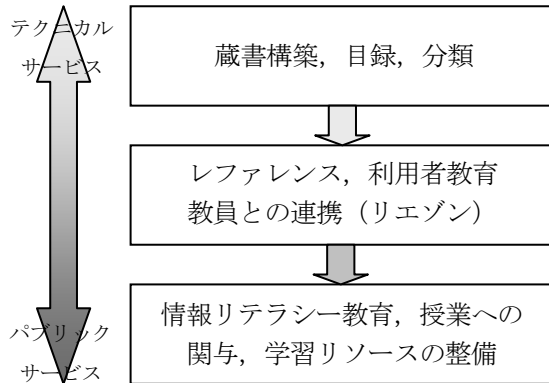


図2 サブジェクト・ライブラリアンの役割の変化

しかし、玉石混淆であるネットワーク上の情報が爆発的に増加し、あるいはメディアが多様化するに従って、必要としている情報をいかに効率よく収集し、評価し、利用するかという情報リテラシーが必要になってくる。高等教育機関においても情報リテラシー教育の必要性が認知されるに至り、図書館ガイダンスや利用者教育といった実績をもつ大学図書館が情報リテラシー教育の一端を担うようになる。更に、主題に依拠する情報リテラシー教育についてはサブジェクト・ライブラリアンがその役割を担うこととなった。こうして、情報リテラシー教育という新たな役割を得た1990年代以降は、サブジェクト・ライブラリアンの転換期であると考えることができる。

図2は、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの役割の変化を図に表したものである。当初、蔵書構築や印刷資料の組織化を主たる役割としていたサブジェクト・ライブラリアンであるが、レファレンスや利用者教育、教員との連携(リエゾン)、さらには情報リテラシー教育や授業への関与、学習リソースの整備がその役割に付け加えられるようになった。大局的にみると、テクニカル・サービスからパブリック・サービスへのシフトがみられるということができよう。

## 6. 転換期のサブジェクト・ライブラリアン

転換期において「教える」という役割の重要性が高まったサブジェクト・ライブラリアンである

るといふことができよう。

が、どのような要因のもとに、転換期を迎えることとなったのであろうか。

前述の『フォレット報告』では、「情報技術の活用は、将来的に効果的な図書館サービスを創出する上で、極めて重要である」という勧告を受ける形で高等教育財政審議会は、「情報技術を活用することによって高等教育機関における知識の利用及び蓄積を転換させるプロジェクト」として電子図書館プロジェクトの立ち上げを決定し、FIGIT (Follett Implementation Group on Information Technology)を設置した。FIGITは、「情報技術に関するフォレット報告実施委員会」というその名が示すとおり、フォレット報告における情報技術に関する勧告を具現化するものであり、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの図書館長であったリン・ブランドリー (Lynne J. Brindley) を委員長として立ち上げられた。このFIGITプログラムと呼ばれていた電子図書館プログラムは、後にeLibプログラムとして結実し、1995年から5年間にわたって継続されたeLibプログラムは70ものプロジェクトを生み出した。その中で、図書館における人的資源に関するプロジェクトとして、SKIP (Skills for new Information Professionals) と IMPEL2 (The Impact on People of Electronic Libraries) をあげることができるが、以下にIMPEL2の分析結果を中心に、サブジェクト・ライブラリアンが転換期を迎えるに至った要因を述べたい。

### 1) エンドユーザ・カルチャー

情報通信技術の発達により、利用者インターフェイスが改善され、更に、エンドユーザが簡単に二次資料だけでなく一次資料に直接アクセスできる環境が整うと、エンドユーザは仲介者を介すことなく直接情報にアクセスするようになる。このいわゆる「エンドユーザ・カルチャー」は、情報流通の中抜き減少をもたらすという議論を巻き起こし、情報と利用者の中に介在する図書館員そのものの存在意義が再考されることとなった。特に、図書館員にはサブジェクトの知識よりも、情報通信技術を使いこなすスキルが必要ではないかという考え方から、サブジェクト・ライブラリアン懐



疑論も生まれた。

しかし実際のところ、溢れる玉石混淆の情報の中から、効率的に情報を検索し、入手して活用するには、エンドユーザに高度な情報リテラシーが求められることとなる。高等教育機関においても、情報リテラシー教育の重要性が認知されるに至り、その役割の一端をサブジェクト・ライブラリアンが担うこととなった。エンドユーザ・カルチャーは、サブジェクト・ライブラリアンを否定するものではなく、サブジェクト・ライブラリアンに「教える」という役割を与えたといえることができるだろう。IMPEL2 プロジェクトでは、エンドユーザ・カルチャーは、サブジェクト・ライブラリアンの役割を失わせるというよりもむしろ、変化させるものであると結論付けている。

## 2) 教育中心から学習中心へ

(from teacher-centred to student-centred)

また、教員中心から学生中心へという高等教育の流れも要因のひとつにあげることができる。これは、教員中心の教育を主流とするものから、学生中心の学習を主軸が移され、多様な学生に対してカスタムメイドされた教育を施し、学生を支援するという高等教育の大きな方向転換である。

資源ベース学習 (Resource Based Learning: RBL) は、デモンテフォート大学のリャンら (S. Ryan, et al) によって「集合教育の場で学生主体の学習を促進するために、特に準備された教育資源と双方向コミュニケーションの環境とそれらを支える技術との統合されたもの」<sup>30</sup>と定義づけられている。「教員による指導 (instruction)」から「学生と情報リソースの相互作用 (interaction)」へのシフトであるといえることができるだろう。資源ベース学習は、学生の自立した学習を促進させるだけでなく、優れた遠隔教育の提供を可能にする。この資源ベース学習という流れは、サブジェクト・ライブラリアンに学習リソースなどの学習環境の整備という新たな役割を付加したといえる。

## 3) 役割のシフト

役割のシフトは、「ライブラリアンからパラプロフェッショナルへのシフト」と「教員からライブラリアンへのシフト」のふたつに分けて考えることができる。

例えば、コピー・カタロギングなどの普及によって、これまで専門職であるライブラリアンが行ってきた目録業務の一部がパラプロフェッショナルへと移行される、などが、「ライブラリアンからパラプロフェッショナルへのシフト」の典型としてあげることができる。一方で、学生数の増加や前述の「学生中心の学習」への転換により、「教える」役割、あるいは学習支援という役割が多様化することに伴う、「教える」役割の一部の「教員からライブラリアンへのシフト」が起こっている。

以上、1) エンドユーザ・カルチャー、2) 教育中心から学習中心への高等教育の転換、3) 役割のシフト、という3つの観点から、サブジェクト・ライブラリアンに「教える」という役割が吹かされた要因について述べた。情報通信技術の発達によるエンドユーザの行動様式の変化、高等教育の拡大と転換が、サブジェクト・ライブラリアンに新たな息吹をもたらしたといえるだろう。

## 6. さいごに

以上、サブジェクト・ライブラリアンの定義・類義語、英国の大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアン類型、その役割の変化について述べた。

戦時中に失われた大学のコレクションを再構築するために、また、1960年代の新興大学における蔵書構築を行うために、サブジェクト・ライブラリアンは、英国の大学図書館へと浸透して行った。1980年代から1990年代前半にかけて、サブジェクト・ライブラリアン消滅論が浮上したが、その後、高等教育の転換及びエンドユーザの行動様式の変化により、新たに「教える」という役割が付け加えられることによって、サブジェクト・ライブラリアンは転換期を迎えた。新たに「教える」役割が求められるようになったサブジェクト・ライブラリアンの中には、「教える」技術を修得するために、高等教育資格課程 (Postgraduate Certificate in Higher Education: PGCHE) を修了し、「教育の専門職」の会員制学術団体である高等教育アカデミー (Higher Education Academy: HEA) に所属する者もいるという<sup>31</sup>。

時代に応じて変化し続ける、英国の大学図書館

におけるサブジェクト・ライブラリアンが、今後どのように変化するか、その動向に今後も注目したい。

#### 引用文献等

- 1 Woodhead, P., Martin, J. Subject specialization in British university libraries: a survey. *Journal of Librarianship*. 14(2), 1982, pp.93-108
- 2 Humphreys, Kenneth. The subject specialist in national and university libraries. *Libri*, 17, 1967, pp.29-41
- 3 及川三千男「イギリス大学図書館におけるサブジェクトスペシャリストについて」*図書館学研究報告*, 9, 1976, pp.316-326
- 4 Feather, J., Sturges, P. *International encyclopedia of information and library science*. Routledge, 1997.
- 5 Hay, F.J. The Subject specialist in the academic library: a review article. *The journal of academic librarianship*, 16(1), 1990, pp.11-17
- 6 Gaston, Richard. The changing role of the Subject Librarian, with a particular focus on UK developments, examined through a review of the literature. *The New Review of Academic Librarianship*, 2001, pp.19-36
- 7 Peters, Janet. Serving different constituencies: asynchronous learners. In *Subject librarians*. Ashgate Publishing Limited. 2006, pp. 117-130
- 8 Woodhead, P., Martin, J. Subject specialization in British university libraries: a survey. *Journal of Librarianship*. 14(2), 1982, pp.93-108
- 9 Martin, J. Subject specialization in British university libraries: a second survey. *Journal of Librarianship and Information Science*, 28(3), 1996, pp.159-169
- 10 Gaston, Richard. The changing role of the Subject Librarian, with a particular focus on UK developments, examined through a review of the literature. *The New Review of Academic Librarianship*, 2001, pp.19-36
- 11 Humphreys, Kenneth. The subject specialist in national and university libraries. *Libri*. 17, 1967, pp.29-41
- 12 Woodhead, P., Martin, J. Subject specialization in British university libraries: a survey. *Journal of Librarianship*. 14(2), 1982, pp.93-108
- 13 Scrivener, J. Subject specialization in academic libraries: some British practices. *Australian Academic and Research Libraries*. 5(3), 1974, pp.113-122
- 14 アシスタント・ライブラリアン (assistant librarians) は、図書館長 (The Librarian) を補佐する (assistant) 専門職である。
- 15 Langstadt, E. Some notes on staff and administration of German university libraries. *Journal of Documentation*. 17(4), 1961, pp.215-232 (1961)
- 16 英国の高等教育は、1992年の継続・高等教育法より前から大学としての法人格を取得している古い大学 (old universities) と、1992年の継続・高等教育法以降に大学としての法人格を取得した新しい大学 (new universities)、大学としての法人格を持たない高等教育カレッジの3つに分類することができる。新しい大学の多くはその起源をポリテクニクにもつ。
- 17 Woodhead, P., Martin, J. Subject specialization in British university libraries: a survey. *Journal of Librarianship*. 14(2), 1982, pp.93-108
- 18 Gaston, Richard. The changing role of the Subject Librarian, with a particular focus on UK developments, examined through a review of the literature. *The New Review of Academic Librarianship*, 2001, pp.19-36
- 19 ヴィヴィアン・H.H.グリーン[著]；安原義仁、成定薫訳『イギリスの大学：その歴史と生態』法政大学出版局，1994，p.168
- 20 Robbins, Lord L. *Higher Education*. Report of the Committee appointed by the Prime Minister under the Chairmanship of Lord Robbins; 1961-63. HMSO, 1963
- 21 大崎仁「英国高等教育のゆくえ」*IDE 現代の高等教育*, 319, 1990, pp.15-23 (1990)
- 22 *Committee on Libraries*. University Grants Committee. Report of the Committee on Libraries. University Grants Committee, HMSO, 1967
- 23 Gaston, Richard. The changing role of the Subject Librarian, with a particular focus on UK developments, examined through a review of the literature. *The New Review of Academic Librarianship*, 2001, pp.19-36
- 24 Woodhead, P.A. ; Martin, J.V. Subject

---

specialization in British university libraries:  
a survey. *Journal of Librarianship*. 14(2),  
1982, pp.93-108

- <sup>25</sup> Martin, J.V. Subject specialization in British university libraries: a second survey. *Journal of Librarianship and Information Science*. 28(3), 1996, pp.159-169
- <sup>26</sup> 英国における大学の学長は名誉職的なものであり、実質的な権限は副学長が有する。
- <sup>27</sup> ガイ・デインズ講演・高木和子訳「英国の図書館:歴史的転換期となりうるか」現代の図書館, 37(1), pp.40-48.
- <sup>28</sup> 高等教育機関における重要な資産としての教職員の資質・能力の向上と開発をいう。米国では特に教員に重点をおき、ファカルティ・デベロップメント (Faculty Development: FD) という言葉が使われている。
- <sup>29</sup> John Fielden Consultancy. Supporting expansion. a report on human resource management in academic libraries, for the Joint Funding Councils' Libraries Review Group. Bristol. HEFCE. 1993
- <sup>30</sup> 神谷武志, 宮崎和光, 森利枝「IT を利用した高等教育の展開:教室外講義, 通信教育を中心に」大学評価・学位研究, 2, 2005.3
- <sup>31</sup> Penny Dale, Matt Holland and Marian Matthews. Subject librarians : engaging with the learning and teaching environment. Aldershot : Ashgate, 2006